

最終報告書

(報告期間 2016 年 6 月 18 日- 2016 年 9 月 17 日)

基本情報

派遣クラブ: 広島東ロータリークラブ

カウンセラー: 市川 太一 先生

受け入れホストクラブ: Rotary Club of Streatham

受け入れ先カウンセラー: Mrs. Chan Bisessar

国際ロータリー第 2710 地区 2015-16 年度グローバル補助金奨学生

大平勇也

報告書提出日: 2016 年 9 月 13 日

教育機関・専攻分野: キングス・カレッジ・ロンドン

中東学部紛争解決学科 (修士課程)

MA Conflict Resolution in Divided Societies in the Middle East and Mediterranean Studies
Program at King's College London

二回目の夏を迎えたロンドンでの留学生活ですが今年は暑さが厳しく、半袖を着ることも多くなってきました。留学生活は終盤に差し掛かり、本最終報告書の報告締め切り日である9月17日には論文を学部提出した後、広島での留学成果報告に向かっている途中であると思います。今回の最終報告では授業日程終了後の6月下旬から現在までの留学生活をロータリーでの活動と修士論文執筆の過程を中心にレポートしていければと思います。



PC roomが24時間開放されているGuys Campus。昼間はピクニックをしている学生の姿も。

1. 学業面での成果

学業面に関してはできるだけ毎日図書館に行き、机に向かい修士論文を仕上げることに専念しました。論文を作成する過程では論理的な文章構成を目指すため論文の推敲を繰り返しました。また、論文構成はチューターの先生の指導に基づき進めてきました。

今回の留学では修士論文だけでなく小論文課題も含めてパレスチナ・イスラエル紛争についての論文を執筆し続けてきましたが、その過程は常に緊張感に包まれていました。少しでも紛争の実態を掴もうと大学卒業後から事前コースに進学するまでの間、在京の駐日パレスチナ総代表部でインターンをし、大使の通訳をする機会などを頂くなどして同紛争に対する関心を維持してきました。また、ロンドンに事前英語コースに参加するために渡って以降は修士コース開始前にイスラエル・パレスチナを巡り、現地の状況に実際に目撃しましたし、またロンドンでもモスクや大学のパレスチナ運動学生団体に参加したりする中でパレスチナ側の考えであったり論理を自分なりではありますが理解に努めてきたつもりではあります。同時にホロコースの舞台となったプラハのシナゴグにツアーや博物館をめぐるなどしてイスラエルやユダヤ人の歴史を学び、その中で政治的主張に対する歴史的背景を考える努力を続けてきました。

このようなパレスチナ・イスラエル紛争や中東での紛争について考える過程は、決して無邪気に「楽しい」ことではなく、その全てが緊張感に包まれているものでした。例えば授業でイスラム国について議論する授業があったのはまさにパリでテロが起こった2日後でした。それらの状況の中であることもあり、プログラムの中で教員の方が一つ一つの用語を慎重に使っていることは印象的だったように思います。自分が留学していた期間にはそのような出来事が本当に頻発して起こりました。欧州での相次ぐテロの他にもとりわけロナルド・トランプ氏の存在は、米国からの学生が多かったこともあり、議論する対象の象徴的存在であったかもしれません。そしてそのような政治的な緊張感は修士論文を執筆している現在まで続いています。覚悟を決めて学び続けた修士課程でしたが周囲の政治問題が絡む緊張の高まりの中、自分の研究テーマについてフォーカスを貫いた「姿勢」は、今後の人生において役立つものであると考えております。

2. 参加したロータリー活動

6月22日に現地ホストクラブであるRC Streathamの夕食会に参加いたしました。地区新ガバナーAntoniou氏がクラブ訪問した同会ではポリオに関するロータリーの取り組みについてお話を拝聴しました。また9月9日には私の追い出し会が開催されました。同会ではチャ

ンさんのご自宅で英国料理であるフィッシュ・アンド・チップスをいただきました。これはもう言うまでもないですが一年間私のロータリー活動をチャンさんを中心としたクラブの方にサポートしていただいたことには感謝に尽きません。陽気で、また頻繁にイベントに誘っていただけるクラブに派遣されて本当によかったです。



お別れ会にて。私の左手がカウンセラーのチャン氏、右手がクラブ代表のジャニス氏。

3. 直面した課題、問題点等

ロンドンで特に気をつけなければならないのは衛生面かもしれません。毎日薬局で売られているうがい薬を使ううがいをしていなければもう確実に風邪をひいてしまいます。忙しきや日常生活の中で起きる諸問題も相まり、ウイルスには万全な対策が必要であったと思います。実際、市販のうがい薬を頻繁に使うようになって以降は風邪をひくことは全くと言っていいほどなくなりました。その他にもかけることのできる費用を抑える中でしばしば妥協しなければならない問題に出くわしました。以下はそのようなロンドン留学中にとりわけ不憫に感じた事柄の2つです。

寮：ロンドンで一番苦勞したことは、寮での生活でした。地価が高いロンドンでは住居費を抑えることが大きな問題でした。運良く住居費を抑えることができたのですが、その分スーパーや公園が近くにないなど日常の生活環境をもう少しうまく整えることができたのではなかったのではと思います。また、退寮した7月以降は Hostel 生活を迫られたことも寮の問題を象徴していたように思います（Hostel 生活を通じて友達を作ることができたのも事実ですが）。

課外活動との両立：8月以降アイルランド企業の日本部門に就職して働いていたのですが、論文と両立できなかつたことから辞めざるをえなくなっていました。再度契約してもらえるのですが、中途半端な形になり会社側に迷惑をかけてしまいました。このように、この一年間、行動が小論文執筆に対する時間に制限され、正直自分のしたい社会活動に充てるのが難しかったです。そして論文作成への専念は少なくともそれが正しいと信じてやってきたことであり、最も安全な策であったともいえます。とりわけ自分が学んでいる中東における紛争解決分野は日本人の立場からすると専門性が高く、事前知識が限られていたことから勉強へのフォーカスは必須であったように感じます。

実際、他分野を学んでいる日本人学生と会話をしていると内容が信じられないほど無垢で、テロという深刻な社会事象に取り組んでいなければもっと純粋に楽しいロンドン生活を送っていたのにとすら思うことすらあります。しかしながら、そのように中東の紛争問題のことだけ真剣に考えてきた留學生活は「平和な日本」で生まれ育った私には、これ以上ない充実感であり喜びでした。また、修士課程では周りにアジア人が少なく、自己管理や議論をする際の倫理的な判断が求



“Scholar”の置物。チャンさんのご自宅にて。

められてきましたが、緊張感の中でも中東における紛争解決学を学んだことは貴重な経験でした。食事に誘ってくださる学部の友人も出来ましたし学びに打ち込みんできた修士課程は大変充実したものでした。

4. 今後の課題、キャリア目標

中東の紛争解決分野における留学体験を「長期的に」今後のキャリアに繋げていくことを目標と定めています。今回の私の修士課程への留学、国際ロータリー財団からのグローバル補助金は紛争解決分野に対するものでした。所属している中東学部紛争解決学科では中東の紛争問題や難民の問題について間近に取り組んでいる方々でした。しかしいざ同分野への就労を考えた時、そのような機関に携わるにはこれから多くを築いていかなければならないということも実感しました。それはいきなりの「中東のテロ問題」への従事でなくともグローバルな枠組みの中での職業体験であり、学術分野における更なる学習の必要であると感じています。これまで扱ってきた分野は要約すれば「中東のテロリズム」ですので、そのような大きなイシューに関わるには同問題への自分の立ち位置を明確にすることも大切だと思うようになりました。もっともこれは私がロンドンに留学していたからかもしれませんが、政治的、宗教的に非常に緊張感のある分野であることから学術の場においても判断の慎重さの重要性は日頃から感じてきました。そして正直なところ、一回この問題から自分を一度解放したいとすら感じています。実際、アイルランドの企業で働こうと思ったのもそのような思いからでした。これは国際的である同企業での社内交流を通じて分かったのですが紛争解決分野を学んできましたが、ステップアップのためにという人は想像よりも多くいました。そのような試みから「国際的な場で活躍する」という大前提のもと紛争問題に対して自分にとって適切な距離感を保ちつつ大胆に紛争解決分野におけるキャリア構築を進めていければと考えています。

5. 今後のロータリー活動への参加

今後私が一体どこの国で働くかも含めてまだ検討中なのですが(そして将来的に変わるかも含めて) 会の条件として可能であれば、世界のどこにしようとして積極的にロータリー活動に参加したいと考えています。この一年間の留学生活はロータリーの輪に入っていなければここまで充実したものにはなりませんでした。



中東学部で一緒に学んできたカザフスタン人のクラスメイトと。

6. 今後の奨学生への助言

6.1 ロータリー行事への積極参加 私はロンドンへの滞在中に強く心がけたのは積極的なロータリーイベントへの参加です。中間報告でもお伝えしましたが日本にいるときに世界でやってみたい役割と思っていたのはまさに奨学生としての役割でした。しかし同会への参加は毎回準備が必要ですので会に参加することを大変に感じることもありました。そのような中で友達をプレゼンに連れていくや、着ていく服装を愉しむなど自分なりに余裕を作ることでプレゼンを中心とした緊張を要する会に出席したいと思うに至りました。

「日本人」であれば正直行きたくないと思うこともあるかもしれませんが、二度とできないかもしれない経験ですので、自分に自信がなくともなるべく多く会に参加することをお

勧めします。実際、あれほどコンプレックスに思っていた自分のプレゼンが今振り返れば、それでよかったんだと感じたりすることもあります。

留学前から国際舞台で日本人が表立って喋っている姿を見る機会は少なく、「自分ならできるのに」と勝手に思っていました。表舞台に立つ苦悩を感じつつ会に出席し続けた自分の姿勢を自分では評価するべきだと考えています。プレゼンの参考のため国際舞台で議論する日本人のビデオ映像をみると「嫌われている」だとか「英語が下手」だとかネガティブな印象を受けることがあります。しかし私はこのようなネガティブな印象を残すこと自体実は非常に有意義であると思うようになりました。そもそも、Brexitに象徴されるように英国では移民への印象が決して良くはありませんが、そのような中でも声を上げる勇気や、表舞台に立つことが私には大切なことだったように思えました。

そして、私自身に関して言うと、プレゼンの内容により彩りをつけることができるよう、職業経験を積み重ねていければと思います。四度のプレゼンを通じて感じたのは一番最初のプレゼンが最も印象的なものになったということです。これはこれまでの日本での生活の中で自分が思うものがあり「発表したい」ことがあったからだと思います。そして今後の人生でもそのような想いはたくさん湧いてくるかと思っています。いつかまた発表する日のためにも（社会人経験者が多い大学の議論でも同様です。）関連度の高い職業をこれから全うしていければと思います。

6.2 モチベーション維持と図書館 ロンドンの大学であれば、個人的には様々な図書館を訪れてみることをお勧めいたします。図書館によって自分が興味のある分野が集中して見つかったり、集中しやすい場所を見つけることができるかもしれません。例えばよく通っていたBirkbeck University Library は紛争解決分野での所蔵が多かったため、関連した文献の調査を効率的に取り組むことができました。また煌びやかなSenate House Libraryでは落ち着いた気分で勉強することができました。そして、“Reading room”, Maughan Library, King’s College London は歴史的な雰囲気勉強ができ、そのことによって図書館に来たいと思えるようにしてくれました。この他にもロンドンには沢山綺麗な図書館があると思います。図書館巡りをしていると自然と課題が進んでくかもしれません。



RC Streathamのクラブ昼食会にて。手前は地区新ガバナーのAntoniou氏。

7. その他特記事項

ここまで書いてまいりましたように、ロンドンでの生活、私の場合は「緊張感に包まれた中での充実した勉強の日々」でした。この一年間、英国が移民問題やテロ問題など直面する社会情勢の中で私はいつもそのことを肌で感じてきました。そのような点では他の専攻している学生とは違い決して純粋な笑顔になることの少ない留学生活ではありましたが、ここまで自分のやりたいことを突き通してきたことは、振り返れば快感ですらあります。そして、そのような勉強に専念できる環境や、ロンドンでのロータリーコミュニティーへの参加機会を与えてくださった国際ロータリー第2710地区の皆様とスポンサークラブである広島東ロータリークラブの皆様には感謝に尽きません。

正直渡英する前には奨学生としての任務が具体的につかめていなかったのですが、私がロンドンでしたかったことはまさに奨学生の務めでありました。ロンドン地区においては奨学生の責務が重く見なされ、大学卒業後に直接院で学んでいる私にはそもそも全うできた任務ではなかったかもしれません。しかし、積極的にロータリー活動に参加することが私に出来ることだという考えから参加が可能な活動はすべて出席し、合計で30回程ロータリー行事に参加してきました。そして、その中で行事に参加するだけでは評価されるわけでないのがロータリー奨学生であるということにも実際気づかされました。また、それは私の社会人としての活躍であるのだと考えております。

ロンドン大学留学やロータリーの輪を通じて得られた人との繋がりを活かして、社会人としてのこれからも世界と日本の橋渡しをするような役割を担い、奨学生としての経験を社会還元していければと思います。



↑4年前ニューヨーク留学中に大学院留学について語った知人は藤村さんの大学時代の友人でした。(私の左隣)